

受講番号 18009 学校名 嶺北高等学校 氏名 中山 陽子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 3年生 生徒数 31 名
 科目名 ライティング 単位数(授業時数) 2 時間 使用教科書名 EXCEED English Writing

クラスの様子・特徴

短大・専門学校への進学希望者が多く中で、数名が国公立大学をめざして努力している。素直な生徒達で、授業態度も真面目で落ち着きがある。比較的基本的な力があり、与えられたことに対しては意欲的な取り組みができるので、それを少しでも応用力につなげたい。

問題の確定

ドリルの繰り返しだけでなく、興味をわかせる活動が必要。その中で、基本事項を復習しながらまとめた英文が書けるようにする。

予備調査

A 授業の観察

主に、練習問題によって目標とする表現の定着を図っている。生徒はたくさん問題にこつこつ取り組み、説明にも耳を傾け、その場ではよく理解できるのだが、自ら使いになすことが難しい。自分としては、活動が単調・説明のしすぎなど改善の余地が多々ある。

B 生徒による授業評価

授業はほぼ理解できており、概ね肯定的な評価。問題はコミュニケーションの点でこちらからの一方的な授業になりがちである。英語を「書く」ことに対しては、難しい・面倒・苦手といった意識がある一方で、日常の身近なことを英語で書く必要性は感じている。

C 学力データ

クラスの平均点は、1学期中間テストで76.3、期末テストで72.8。予想したより基礎力があり、指定された範囲は堅実に勉強する。しかし、受験に対応できる実力からはほど遠い。また、少数ではあるが、中学校の既習事項にかなり不安のある生徒もいる。

リサーチ・クエスト

教科書に出てくる個々の重要語句や構文を覚えるだけでなく、実際にそれらを用いて、ある程度まとまった量の英文が書くことができ、その中で自己表現ができるようになるにはどうすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

(これまで、各レッスンの最初で、そのまま教科書のモデル文から入っていた。それだと現実的な面白味もなく、「今はこの表現を勉強していて、こんな場合に使おう」という実感が薄かったのではないかとと思われる。) 毎回の導入部分として、日常の身近なことや自分自身のことについて、各自で簡単な英文を作ってみようすれば、目標とする重要表現にアプローチしやすいのではないだろうか。

実践1

新しいレッスンに入る際、教科書を開く前に、ねらいとする表現を含む簡単な英文を2～3文作ることによって、目標をわかりやすく意識づけする。ワークシートを用いて、出された文(日常の身近なこと、最近の行事・休日、旬の話題、噂の人物などについて)を英語に直す。次に、同様の内容で自分で一文作ってみる。何人かに発表させてそのうちのひとつを板書した後、間違いを直して全員への例文とする。

検証1

実際に生徒が作った文に関心を示し、新しい表現への導入部分によく集中していた。ただ、お互いのミスから学んだり、発想の豊かさに感心したりする効果をねらったが、自作の英文発表に関しては恥ずかしさからあまり積極的でなく、型どりの文しか出てこなかった。また、生徒が口にした英語を即その場で、モデル文としてより良いものに直すのはなかなか困難であった。

仮説2

(英作文をさせると、生徒の多くは語彙力不足を嘆くが、最も感じるのは語順や品詞をいかに理解していないかということである。せっかく練習問題で覚えた表現を実際に使いにせせないのは、英作をする時に不可欠な、ちょっとした要領を知らないことが大きな原因だと思われる。) 各生徒の英作文を添削すれば、少しずつでもこつがつかめるようになり、書く意欲も増えてくるのではないだろうか。

実践2

そのレッスンのねらいとする表現を使って英作をする課題(書きやすい状況設定のもとで40語程度)を提出させて、添削。全員に返却して必ず目を通してもらう。間違いを重ねることによって弱点を認識し、自分で考えてみるという流れをつくってやる。特に目についた点は、クラス全体にアドバイスを試みる。

検証2

個々に添削してもらうことで、今までは書きっぱなしだった自分の英語を振り返るようになった。その結果、添削内容を生かして英語を書くことに留意し、回を重ねるごとに少しずつ改善点の見える生徒が増えてきた。量を増やすためだけの、文脈から離れた文が減っている。添削に関する質問をされ、解答することによって、コミュニケーションにおいてもプラス面が大きかった。ただし、どこまで添削すべきかの基準はまだ決めかねていた。

仮説3

(これまで単発的に記憶している語句・構文をいくつか合わせてひとつの文章の中で使えるようになれば、自然と書く量も増え、表現力も豊かになってくると思われる。) レッスンがいくつか終わるごとに、それぞれの目標とする表現をひとつの文章中に取り混ぜて英文を書いてみたら、質・量ともに向上して自信がつくのではないだろうか。

実践3

授業中の課題および定期テストの問題として与える(書きやすい状況設定のもとで40～70語以上)。最近習ったばかりの表現を複数組み合わせ、日常の身近なこと、最近の行事・休日、旬の話題、噂の人物などのトピックに取り組むことによって、英語を書くことへの抵抗感をなくす。語数・ミスの数・内容を調べながら、質・量の変化をチェックしていく。

検証3

生徒の感想では、ほとんど何の条件設定もない場合よりずいぶんトライしやすくなり、書く量も増えて、今までよりは多少自信がついたようである。実際、全般に語数の増加とミスの数の減少が見られる。時々、ユニークな考えや出来事を示す文も書かれていて面白かった。しかし、その変化が確実なものであると結論づけるには回数不足であるという点と、内容の変化の見極め方があいまいであるという点で、計画が不十分であった。

研究の成果

英作文に関しては、これまで、全体的な出来と指定の語数に達しているかという程度のかかなり漠然とした指導にとどまっていた。しかし今回のリサーチで、課題の設定を工夫したり、個人的に添削を実施する方法をとったことなどにより、生徒にも「書かされている」という意識から、英語での自己表現に対して以前より前向きな姿勢への変化が徐々にではあるが見受けられた。授業の目標を明確にし、生徒の反応・変化をきちんと観察し続けることによって、どんなに忙しくても常に問題意識を持ち、授業を省みることの大切さを再認識することができた。

今後の授業改善の課題

このリサーチで、「英作文は苦手」という長年の思い込みから抜け出して、生徒・教師ともに一歩前進することができた気はするが、その根拠となる客観的な結果が得られる実践にはいたらなかった。効率の良い添削方法とより具体的な検証方法に変えることが、さらなる課題である。同時に、生徒の意欲、関心を引き出すために、明確な目標・計画づくり、与えた課題に対するフィードバック、授業評価などによる振り返りを常時心がけたい。